

# 御嶽自然休養林を活用した自然体験活動の実施について

岐阜森林管理署 濁河森林事務所  
森林官 早川力弥

## 1. 課題を取り上げた背景

御嶽山周辺に広がる御岳自然休養林、そこには自然の豊かさと厳しさがあいまって、壮大な原生林が形成されています。

近年、森林に対する国民のニーズが多様化し、なかでも自然とのふれあいを求める国民の要請も年々高まってきています。このような中で各方面から当署に対し原生林の案内の依頼があり、今年度については御嶽少年自然の家をはじめ4機関からの要請を受け、原生林遊歩道を使っての自然体験活動を実施しました。

## 2. 技術研究の経過

実施にあたっては、案内用の資料を作成し、基本的な部分をマニュアル化して誰にでも容易に案内ができるようにしました。

資料の作成にあたっては、御嶽少年自然の家・森林技術センターと原生林遊歩道を回り、ポイントをどこに置いて説明するかなど具体的な案内方法等について検討しました。

案内にあたっては、基本的に

- ・こちらからの一方的な説明にならない。
- ・相手に気付かせたり、問いかけにより、相手が疑問を持つようにしむける
- ・3時間程度のゆっくりしたペースで回る。
- ・少人数のグループに分けて案内する。

こととしました。

案内資料のポイントは

- ・原生林の樹木は、どうやって成長していくのか？
- ・原生林の生育に影響を与えるものは何があるのか？
- ・家の周りの森林との違いは？

などをポイントにおき、長い年月と競争の中で原生林が成り立っていることを理解していただきたいと考えました。

作成した案内資料は、

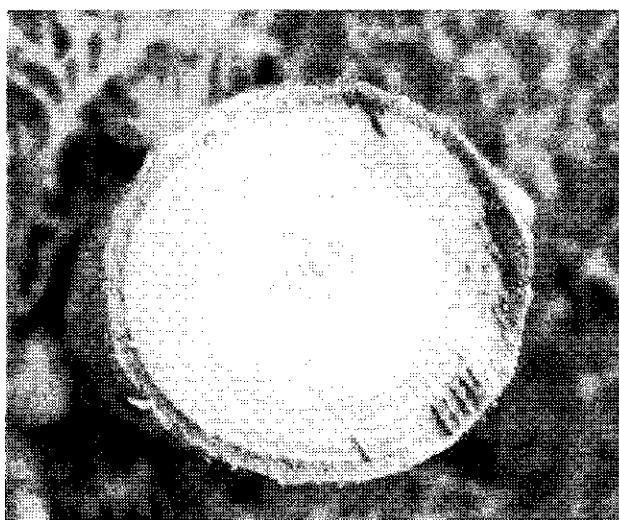
- ・根上木が多いのはなぜか？（右写真）
- ・サルオガセがどうやって生きているのか？  
（下写真）



- ・ とういうところに、樹木の芽が出ているのか？  
（下写真2枚）



- ・ 枯れ木の年輪を数えてみよう。（左下写真）
- ・ 樹木間の競争（右下写真）などの内容で作成しました。



### 3. 実行結果

今年度は、下表のとおり案内を実施しました。

月 日	実施主体	参加者	参加人数		案内人数	
			大人	子供	署	セ
5月27日	御嶽少年自然の家	小学生とその家族	11人	7人	6人	1人
7月23日	岐阜県生涯学習センター	少年団体指導者	3人	22人	6人	
7月30日	岐阜県自然環境森林課	家族及び一般	18人	14人	7人	1人
9月30日	レディースネットワーク小坂	小坂町内女性	40人		5人	
			合計	115人	計	26人

小学生は、鋸を使ったり、根上り木をくぐったり、植物をかんだり、なめたり、臭いを嗅いだり、体で感じることによって森林に興味を持ってくれたように感じました。

第2回目は、参加者のほとんどが高校生でしたが、高校生に興味を持たせることは、たいへんむずかしいと感じました。

第3回目は、大人のグループでの参加もあり、一部には植物のみならず、野鳥、動物などいろいろなものに興味を持って

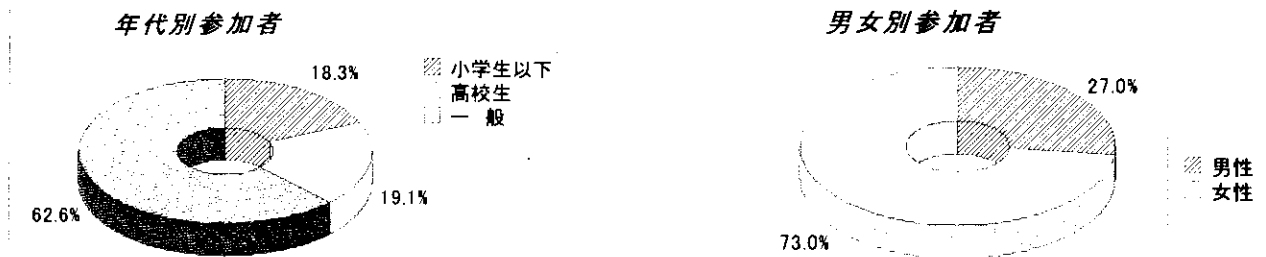


おり、説明者もそれに対応した分野の学習の必要性を強く感じました。

第4回目は、案内時間に制約があり短時間であったにもかかわらず、熱心に聞いていただいたように感じました。

全員が地元小坂町の方でありましたが、原生林遊歩道は初めてという方が多く、「私たちの住んでいる近くに、こんな良いところがあったの？」との感想も聞かれました。

参加者は、小学生、高校生、一般と年齢構成も幅広く、また、男女を問わず参加していただきました。



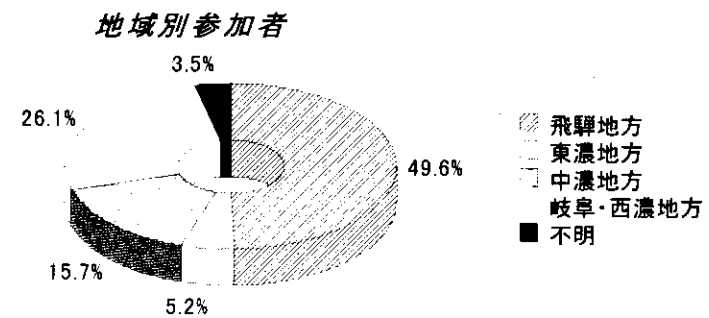
地域的には、北は吉城郡から、西は揖斐郡、東は恵那郡まで県内各地から参加していただきました。

年代・性別の違いによって、ものの捉え方・感じ方が違い、それぞれに合わせた説明の必要性を感じました。

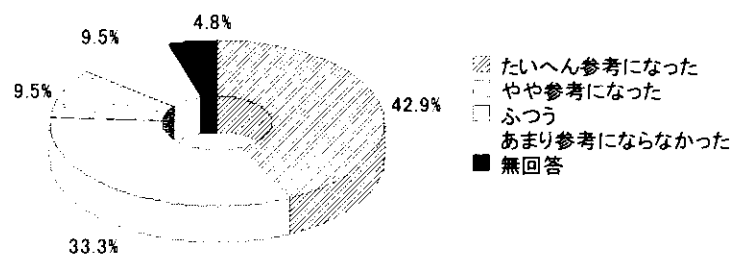
また、身近に森林のある人と都会に住む人では、感じ方に大きな違いがあることも感じさせられました。

2回目に案内した、高校生のみなさんに対しては、実施後に自然体験活動に参加した感想についてのアンケートを取ってみました。

アンケート結果をみると「たいへん参考になった42.9%」「やや参考になった33.3%」と7割以上が参考になったと答えており、それぞれが、何かを感じる事ができたと思っています。



第2回自然体験活動に参加して



#### 4. 今後の課題

実施した結果、以下の課題が残りました。

- ・年代や性別にあわせた案内ができるように内容をもう少し密に検討する。
- ・植物はもとより、動物・野鳥に関する知識の習得の必要性
- ・案内コースの追加  
植物を主体とするコースや、コースの長さを変えるなど、参加者のニーズに合わせた対応の必要性
- ・関係機関との連携の強化、及び、参加者の幅を広めるための積極的なPRの必要性

今後は、これらを踏まえ更に充実した案内ができるよう取り組んでいきたいと考えています。